

## 定年退職教員紹介

# 篠原昌彦先生のご退任にあたって

宮 地 晶 彦

篠原先生は、1944年愛媛県生まれ、東京大学理学部数学科を卒業、同大学院を修了して理学修士を取得された。東京大学理学部数学科助手を経て、1973年4月に東京女子大学文理学部数理学科に専任講師として赴任され、1978年助教授、1992年から教授を務め、2012年3月に定年退職された。1992・93年度と1996・97年度の2期、情報処理センター長を務め、また数理学科の主任を3期、大学院数学専攻の主任も3期、務められた。本学在職の39年のうち相当な期間を、責任も重く実際の仕事もたいへんな役職をお務めになったことになる。

篠原先生の専門は確率過程論と数理統計学である。確率過程論での最も初期の論文は日本学士院紀要に掲載された「ポテンシャル論のマルティンゲールへの応用」(原文英文)と題する論文である。数学の論文の概要を紹介するアメリカ数学会発行のMathematical Reviewsという雑誌があり、たいいていレヴューアーは論文に対する評価のようなことは書かないのだが、先生の上記論文のレヴューにはin a fresh and ingenious wayという言葉が入っている。確率論の分野ではボルツマン方程式やマルコフ連鎖などの理論的研究をされた。また、通信工学に登場するマルコフ連鎖の定常分布を計算するためのコンピュータ・アルゴリズムの開発や、乱数を発生させるアルゴリズムを改良して確率微分方程式の数値解析に応用するなど、コンピュータ・シミュレーションを用いた現象の解析の研究もされた。

篠原先生には2冊の著書がある。ひとつは『確率・統計』(朝倉書店、すうがくぶっくす8)で、これは大学教養課程の微積分および線形代数の知識をもつ読者を対象に、確率論と統計学を解説したもので、本学と上智大学での先生の講義が元になっている。すうがくぶっくすシリーズ編者の野崎昭弘氏は、編集者短評で「説明は淡々としているが、重要な定理についてはその意味——条件の効果とか応用上の意義に必ず触れている。これは、初学者にはたいへんありがたいことで、本書を教科書として使えば、私のような素人でも、確率・統計の講義ができそうである。冗談でなく、一度使ってみたいと思っている」と書いている。もう1冊の著書は『確率過程入門』(エコノミスト社、ファイナンス工学シリーズ)で、これは先生が本学の高学年および大学院生に対して行った講義の内容を整理したもの、とのことである。初めに測度論に基づく確率論の要約が述べられた後、マルコフ連鎖、ブラウン運動、確率解析が解説されている。数学の定理が厳密に扱われていて、最後には金融市場のモデルであるブ

ラック・ショールズモデルに言及されている。

以下、先生の印象などを思いつくままに書かせていただく。私が本学に赴任したのは1995年で、そのとき篠原先生は教授でいらっしゃった。私の研究室に新しく入れるパソコンと印刷機の設定をするのに、先生が日曜日から土曜日まで出勤されて、私のいない部屋で一人で私に代わって設定をしてくださった。先生のご自宅は千葉で、本学まで2時間ほど時間がかかるのだった。私を知り合いの若い確率論分野の人にそのことを話すと「篠原先生、親切な人ですからね」と言われた。数理学科の先生たちでお酒を飲むことがしばしばあったが、篠原先生より年配のK先生という豪放な先生がいらっしゃって、そのK先生が「篠原は気を使うんだよ、よくね、細かなところに気を配ってるよ」と言われた。篠原先生は笑って聞いていた。数理学科の会議などで、教育や生活面で学生の面倒をみる仕事について話し合うことがあった。最近の大学の傾向で、学生のケアを事細かにすることが近年とみに増えている。そういう議題のとき篠原先生の意見は、大学生は一人前の大人なのだから面倒を見すぎるのはよくない、放っておくのがよい、という趣旨のことが多かった。先生は会議で自分の意見をはっきり言われるけれど強硬に主張することはなく、自分がこういう意見を言ったらどういう効果があるか、と考えてから発言されるようだった。先生は、数理学科の共同研究室のこととか、様々の機器や図書のことなど、学科全体に関係する細かな仕事によく心を配って、いろいろ面倒を見てくださった。共同研究室の隣にある物置の整理を先生がお一人で始められたので、私も手伝ったことがある。先生はしばらく前にはよく大学の昼休みに、テニスをしていらっしゃった。休暇のときに日食を見に外国まで行ったとか、休日にパラグライダーをしたこととか、少年のような好奇心に富んだ話をうかがったこともある。

篠原先生は学生に人気があった。先生の授業はかなり難しい方の部類で、学生は単位をとるのに苦労していたようだったが、4年次の先生のゼミは、毎年、楽しそうで元気があった。先生の研究室が私の隣なので、毎週ゼミの時間にぎやかな学生の声が聞こえた。先生の声はたいてい小声でよく聞き取れなかった。先生の4年次ゼミではしばしば、年度の最後のまとめをするのに、授業期間が終わった後まで学生が登校して、にぎやかに仕事をしていた。篠原先生を指導教員としているのでない大学院生が、指導教員の部屋でのゼミの前後に篠原先生の部屋に来て長いこと勉強していたことがあった。先生のところに卒業生が訪ねて来ることもしばしばあった。先日、私のところに来た卒業生に篠原先生のことを話したら、「親しみやすい先生でしたね。まんまるな顔で目がぼつとしてる先生ですよ」と言って、思い出して楽しそうであった。先生は、ぽっちゃりした体型で丸顔で、5代めの小さんをやさしくしたような面持ちだった。